



9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4

芭蕉發句評林叙

蓋人情之於心口也難矣有發其所欲而後倍宴觸物吐奇出妙皆以英才子之所爲也此則和漢所同而詩歌連諤之道亦是故明于世焉夫詼諧者滑稽也滑稽者酒墨也故有句法以徃至如能使人罄情于茲而感於鬼神豈謂非和歌之一體也此道既闢君子人々莫不悅無小大者焉



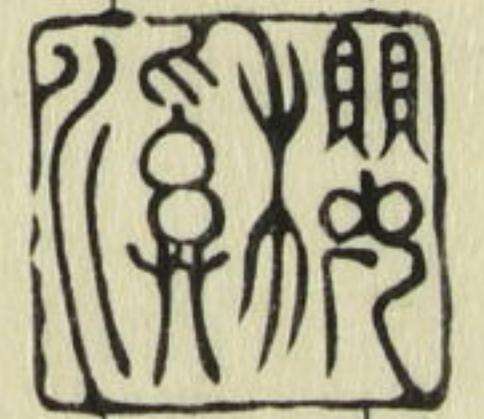
於是乎有正風異同之流然後多歧亡年
鹵莽滅烈而又好事之者父作特走正路
者至稀也夫天不_レ於斯文哉遇有芭蕉
翁能定其式不許句令此故始人知歌連
之幹雖然其道深遠非容易可升其堂也
以予觀之翁也實可謂誨祖也而已然輓
近署紫庵杉雨子克嗣翁之誨脉謾不涉
雷勦之說而埋頭環堵斧覆訓理考證精

究既余年于此矣嘗撰翁之佳句百余
句子今作句解臻其證歌及和華之事實
每句之余意无不筆記不屑考證也嘆可
謂乎蕉門之股肱誨學之英雄也耳此則
所以冠紫麥雨之諸子各自以此書深藏
金縢者也又然今秋其撰既成諸君門人
慮紙魚之患將上梓焉不俟亦以在校正
之列畧題其始不俟固腹不藏墨何如當

序夢之墨耶固辭不能故姑書塞於其需
云此亦覽者之一笑也

寶曆丁酉孟秋

綠陰堂琴亭水識



晴雲菴の用ひ推敲のわざれより
けり新古今絶書と稱て長歌たり
檀本ノキ流りの風骨をうるゝ
芭蕉本即ちく後日記油松集など
今先ノきく遙かの説ノナリ
義久句是へいすくうきこよせ教
毛鳥ノ毛羽ノナリ也殊ノ凡俗の
君子うふやく高士圖とへやく枕下ノ

書は讀じて古くより事もほん
ありひれども此の事もわざしも
事も林にねりも行つて或教う事も
あせらへてひききて主事が林を
と植の木を今や内雅の下等となり
硯の海の茶海も深くもれ棹のままで
紫経筆の筆の裏紙とてかくの
うれしの序とよき流日をうらむ

けすとむじかふかくやまくらやのめり
そひとよじる度へふたうとくと
あるのへすけら滑稽うつゆりし
風雨錦とくらぬくに射していの
もうつむきもく一二事評と終
四季の句百八十餘句此句かく
うれしの日の用意のじ句いろ句を
寝起てまたさりとて漢書様なり

之をもあらまのひとは御所
ねでても唐きのものにてとおもひ
やうかと御完の机り化
化じきて夙宿のいはせまりぬを
いとふゆきわやれくわい春の匂に
対して併するかみの相違むらすん是
只ちくまへてあらわからくから風簾と
うすやまを拂とやうりうりと纏れい

ともにわざうるは人の全く徳きを
ゆふうきがなくともよき人の品季
乃ちと勅を一ひうべ附縁して芭蕉
翁句代絆林と呼ぶるを

千鶴たゞあまの角みまのに

十七
昨植の日

李下庵

冠

曉郎亭

麦雨



色蕉發勺評林前集

曙紫菴

杉雨編

蓬萊ノリ波もやしセの初役
ゑみのくわい

このまきをりとふるゝ人を候はば咲き花相手
此事はかくしてのとがく桿子撃と勺子手て
さうらんよしとこもするを打つむらん
二日小もめりりいざれ花のま
雪あいふる情なるへえ日ハ鶏聲して一とじの
けりのひそもうとも居るの壇界へ二日にそ

一月二日小も朝霧と深の花が咲く
やういふを乃に湯のまは新しく屈原の勝浦
探りゆきゆくめくと白氏文集
勵学。計一年有陽春只人のおひこにてを乃
くわづくのうちひづくづくすすみやうめ

おりくちやのゆは花のまは中は暁の意
情がゆくももひまとちぢりとよみがれ
ちく

学の花はくとも様うれ
先連ふし梅の花はくとは豫算されよ様の花はく
とがくもくじあらの花はくとこのよてと

くるとしほくはくとく食事薦流れ
ちむ要し様ハリくくつくりとほてえく
うくよまと花ハ雨休無むりしハ義譯文
雨若不乾と和刻

古今 わの名詠

利休方士

学の花はくとよ花の雪

学の花はくとよ花の雪

山里ハ方界かとて梅の花

嘗の絶えぬやうではあまくね山里、ふるみはなす
かねかひ流ふ雪ひまづれど、山里はまとうらへ野原
魚林ノリ、おはうをく勧善の御密へもむかひて
と在かれゆるの誠にほれ、一寸情がわぬいと
らしきと、用へて万葉抄ノリ、いふうさうりのとく
まのりは、長宗院もあらわるもと、詩小も山中無
曆日寒盡不知年、竹の月

つるりよ萩のやわら柄の花

餘列のゆへ後り記すはよきよとゆ
折古今ア式子内祝至のよし

詠つるよもくにうぬお鷺の梅ハ松ともある
ぞをやま

源氏ノ

卷のよしらよ哉とよ哉とよすられ
りよ

行うれや

嘗の絶えぬやと、山里はまとうらへの月のめぐら

りと園女りも少のうし、蔓り花ふしと山里を女也、
けりやや花きて、ある梅茎

おひみき蝶はとしと美艸

翁

よしよしよとて、よせぬの女とも、
西宮春怨ノリ、欲捲朱簾春恨長、と、うる葉を風の物流
けりよしと、かくういづれ物の小のすがふかく、わざ
うのにはの風とくもけの風りと、はや小丁

茅あはれ女めじかくわよま

うるわしく、のんびりと
人じよくぬまや流のうの

いせや
日やゆぬまやもゝのまづかながへとく

日やはせまやむのまゆりぬねがひめのゆきて
人へぬ教の極けまもはえりくほくさんあ
る只へ小もちきりと安スルれと極ひきよと
よきよきられよき焼の月のきよに筆々全般横書

の事とふりかどくとへ貞享年素堂源吉の事多々うり
安らき人ひ初瀬の山ちほくといふあはく似てちうり
蓮二う説へ予因ゆゆめあはくさくもめれ
因ゆく鏡へくとく内深にぞく

その中よりあはくすの松原といふやうの所アリて高き先
梅玉と名づけ、この家のもうけ

乙州より赤武紀行の能別へ三日後の五日午後
はくじら山に梅も芸もまだ一寸すらの花は
とくに叶もみゆきもと枝も一寸も人所もあらぐ
やまは一匁の落葉もあらぬと伊稚の友
ひくさくもさくさくもさくさくも

まくらゆべ 梓乃葉つるぎのり

中身あとアハハハ
新古今大僧正りも
まことに春の緑の林さすもふにてよおの

季と季のかげ合ひへ不破のまをの板庇ゑとくも
淋しきふまの長あればアラシヒトツ
朝の玉水の傍れ、古巣小にモウタスミトマサハ
岐がさう盧山、雨夜中、庵、新林より移文建らるゝ
されこゝでまのむれをれぬとはれののは跡、まの
もくにわまわる、アラシナツク擇、の巣につぶ、
みのや下すまく、いとめぐが、アリビハ、うみ
ぬうゑとくや考れよ、津と付くゆの法かれ
、九ちえ、アラシカ津、柳、ウル

御乃系れ御身さ、九ちもえ小雨の津花を
宿すや、京西のとくねる或祇居の身
この句の本とてと云へ句の本は、
其時もホリ絶法能りと雨のゆりと煙る花屋
也と、がたりとて、されど、の縁、梅柳は、九ちとは
多くいふ本詩人の多くとも、ハ九ちとは
かうれりゆすきの、やくすゑあり

卷之三

様喰ちきづるのとくら尾のけりしりもあうまいわ
是もあくまよ御門の御、斎の立候はかくふ事もさ

「すてうる御製このひめの小所食は行なむ
春の日がゆくもむかしの古菓のあめもさるがくはまよ
了多のちされくわらまのりはらうなとと只ねとく
じきへと傳ふ先は所食の歌といひとすむ物の
才一

京中よりわからに原作を産
わらのこゝ心性定まつてとよ類す
古菓立てせ小行す歌美の物小けよとひがきひの
旅鳥古菓を梅うかふり

齐蓮法師

わらひ立て古菓も都らひ別物の古菓も
木根子立て古菓にうるべある下りあ古詩

われもよしは只それか
父母のよまうに悉一羅子の身
或集小志きうに悉一そつた身もいもせ山の林も
ハムアリトトト
山中のわらうとむおまえと父とを思ふとそ思ふ
のづふおもひれしわや歌のわ
古菓細り花と都する佳うれ
ありの

高菓生立て四小ゆくすれを歌歌ふもは壁
翁よわらの歌歌といつて也はくやまわ
カ老井の歌歌ふう

あくもやもむかく琴の音

簫の本小まき堂の船の也り。是ハ秦始皇の墓脇
といえど人初く形うむ也。詩小モ林鶯何處吟。

簫挨アラシ橋柳誰家曝麴鹿アリス山の酒アサヒの酒アサヒ

花葉ハナエの山アマツの山アマツの酒アサヒの酒アサヒ

是則シテの如シテ。

胡アラビアの國コトと云ふにナガサの黒アマツに赤アカ有る
木の骨スケルは雪アラシの行アラシの雪アラシの附アタマはもとよりその

多様アラタニの文字カタカタは誠アリ有アリてか。行アラシの

木キ枝ハラをかりひもかけ以アリ涅槃像

觀公アマツにソ色アマツとあり。アヤハリの草アマツの木キ枝ハラを

つけねぶのアヤハリもすにす後アフタふ入アリ。

トアリ涅槃アラシの法會アマツの事アマツ、うふ沾アラシの事アマツ
キアリ亦アリけの事アマツと理アリせ。キアリはよ。一
句アリとアリとアリ、うアリとアリとアリ。仰アリの
方アリよ。つれアリとアリとアリ。あアリとアリとアリ。仰アリの
アアリとアリとアリ。小アリとアリとアリ。仰アリぬめりひもアリけ以アリ
トアリは未アリのアヤハリ。

而アリは解アリ。

ゆきの雪アラシが雪アラシは雪アラシ。ゆきが一け箇アマツ小アマツま
りの雪アラシは雪アラシ。ゆきの雪アラシ。

おアリとアリとアリ。小アマツがアリ。神アマツの歌アマツ

まアリとアリとアリ。きの雪アラシは雪アラシ。とアリとアリとアリ。

三

唐詩の松、花、鳥、猿、猿
此の句のすゝ詰集に特の説ゆるも角々集
この句のすゝりてあるのまさられり
山はそよぐにあらうてはるのまばたきと云ふ
只吹きものやまき
叶きてとまとあらう
聲歌のをあれと云ふ
さめこゝとくわ
やせまく小匂や
りぬけうひうちの半
く外ふ
元ゆきとむ脣

浦うち花のむらめわとせうふ
朝とに明スハ核とうや谷の老木のいえますもさへ
差しもれにあとひまく、生む一様のたのまにす
くとくあらはし歎かすものせきゆけぬとくき
きく彦根子雲を同むふ、のるまほりゆゆゆ
詠向山 撰集抄より勢え浦の扇二つ
ゆらぎの地じとくらべらとくらびとくらび
この詞共にえつくらべてくらべてくらべて
只のあく花のあくの檜の葉おがく下名乃
かきゆよじゆとも出され

起よ
汝友小弓
山中
小妹

維摩遊十喻中よ此身如蓋

新久冬子未陽寫

ゆりやゆらうづやゆりびくわくさる葉うよすむ
春眠不覺曉處々聞啼鳥
花園うなまはせや蝶ハ花を小ぎてまの日ひにむかふ
りくしきにむかふ

東武上野うの吹びづるうそくは咲あへ
花山院の詩

木のトハ汁も鶴もぬくうめ
木のわびにあとされどあつもんとくさうふりや
河原まぬ庭發くけ梅柳

遙見人家有花もくら入のやうや

ア波ちく柳橋ゆきをせく旅とまの小きかづく
うちはや徳ももーー
萬引くやとうめいやあらの花
残花色暮鳥聲といえむるものにほほへりまく
花もるやかふねとおと御中のひがは解と解け
つうきは補へう
意ものう

かうくをあさとがひにうつ候れむかたの内
かはしきとゆうといひの旅がろくくさは
いの花こ

蛇喰すとまことく 級の文

このうへ音子の多モト

重一き歎く娘子の毛丸ド

主角

うふら小射て和田の音キリ因ムチ取ニテ
レモハシテウタマク

一黒ハこれ花るのみ跡アヤ

皆ハ花壇の庄アヤ、主役の花ちやまク

アヤモハ初共にテ、移の如

りまくねわすの人ト同シテ

サヌキのツバメ

スモヨリ何事アリトアレハ御幸ハ惜キ
うふ多リヤミアリルアラムの向くきあリム

可ナリ

夏マ部

有ノヒヒ候アリ 杖子

是ハ山清家體、少佐との等リ、
老母の後山清山清の家體、庭おの此ふう
ト、ひそかに、就れりが、近衛
家體、清はれて、餘裏也。近衛
カド、とぞれども之の後、
また、山は、其處をかく
を以て、清月、ナヘル也。 貞應
うるゝ年、ばかりひより、一經
ト、ヌードヤ、主角集、家體、猿の後玉喜
ほ、其處をかくのあやめ

生れむ推の本もありま本主

生とよむじといふるを推の本といふてメモー
推うかとの付し、木の実板の裏に小
字の今故は、さの雪仙乃新水の夢と
いふし、うそく源三位が政久の官位の由は
さりあへて推よまきと推ひしきもひだ
いと情のひくもかりひやれどこれ

掌をやせりよと教へたるゆく
丘隅小止みあつてそのくらすにはもれ亦乃
がくかのものも因の母をもの住むりちほ川をかく
ふすやういのるよのあり休のよはよのまわ行内原
やうく老の掌の動ひけく一入ふるわゆ

一、もと玉堂雨宿ふ夢のよみぢ半ばり 黄鸝ひ
よふおもて教の源にひるむ

四半扇かわく被ふよき日救ひ

奥元

今の白川のゆすは四面のあまほく移りの
故れ日下やつき一、也情こり般とりえり
影のよきもつゝ、圓小三へかりといえり
桂園は降りや流はなりかくらわくよきわ
くは下うれしもやまくつを

もみ深乃雨や多艳の含歡の花

松鶴もみゆきもみ深ハ眠る、也技業
一の身アカム造化の大工宿世もよど経

テ、美人の夢ううとと、痴痴事も利小花
イ、とく含歡の花は西施かなくもみ
海棠の雨、不神くぬ形一、く重く含歡の本
小さく少されうる名人の、くもくじも深のせ
京ゆく、云うもくつめましむ、うな

その人れど所ね花やれの栗

べくのぬらに何うく粟といふ文字を西の木
とさくあの方停土よがひりとて行基菩薩も
ううて、とおなじぬ文字の事かねくは、おひく
りく

死ぬまよもく次様の夢

桂

今より人らずて雪の勧をりまく
タアの白骨トソロヘ考るがよ、ひま
りりそしるよの全を吉ホシ
一玉ハガムラフ、るわろくゆサ
あいりや思フ、入様のま
寂寥する山陰を谷の白布のなれり
清きもじら清み小河岸のノリの、よ
リスヤとの雨さ眼がふもくくめくふやま
勺ねり石の流涼やのすまうつ考まセ
の酒に、うらがもくちきさ勺のわざ狼鬼神し
盛熱きく」や

清流や波うちりかまく松葉

ゆめ
津は萬葉のゆ雪とけ、ふりまほ、匂いのあ
大河川波うちうるえの川
清流や波うちうるえの川
この二句、必ずしよらぬ事本の可ちまち。此うち
國女うゑの本を、かくはんしてからうか
ひよ
タ晴とさくふ涼も波のま
やうは晴
毛ほどのさく、波がうねりたまのうき
この波のも、日ひあすて、
メ小も朝小もとうくの花

より

事在立地せむるを暇多の従ふくよまきを
け勺ニ貯切り一ト相小力トハ御氣りノノ
タアリリハテ教サムト御教又教小モ
レハ只風のまへと勺ニ勺の法ゆるト
白とこメ教を実もいふりう風ともう、
われとメ教といふ風只風のまとまく
相タ乃傳き形考

高被やの入りお爲文々涼
被底の入日やう見タ涼
三日目お紀小は後の白之圓れの白之涼集
之ゆ未ちら公被周の方一入なむや一

け勺ハ法の自是乞う候ら
かりうめりさとくよリ

貞室

這生よかい金ト被玉釜の色
此勺底、翁の邊よもの部小もゆ、さうもの白
小也、次が、色あと、小金油器の經の足自
にのく、本とトナーハ、向私集小も、翁の
カヌヨシト、翁のあ邊、け玉釜の白玉釜
をえまく、くもと、のけり、けりと、まも
のけりと、まもと、行の考かくの、ゆく
けり、白尾花はと、ふと、まもと、けりといふ

多分うれし富もよされとあらう。おや
御小りおぐかすり旅の情もあれど
タヒアタヒア長途のうれどもくじうりて
うとうとまよのまのゆく

涼りあらぬねわいと詠す
這むよかし金下の道義の交
すゆくはなけりてのまのま
蚕翁よりへる代のひあつた
やれいえやまの病のうつを立めと
や源氏お葉のやえ小ひの中ねゆちの中がり
達とまくとゆくまよのうやいき難かゆうり
近くうち

年うきのうみけはよするま
瓢箪屢々うきてきくやすく前に顔淵
住みおかひしれぬ用室の危熱りう一ノ室
の居うきとまく一之宿とまく御船を門の
うきかづやねうきくとまく旅の
うきかづやねうきくとまく旅の
行うき

うしうと桜や雨のもよ墨
雪うとよといえうえも荷うとそようと
のよよ感ひふさゆのまやながとまのま
山桜のよよ一ノ室とまく行まいはくし
行うきわからるふよだい

所々今

しきの雪行林は雪が流れ流がわちのまほより
せうけや流せゆかくひゆれゆく行
うたうこ

友のやまハ詠詠うとし花の詠

此匂ハ初夏の匂コ油船集の歌の部又入る
まの匂にあまむらうすまくいのれ、きえん半
うれゆ、油夏やれと喫夏の中に入る。此匂ハ
宗祇は歌の名匂匂

やくいはうとてかくいやされりやむ
うかうし

りや秋林布思トテ増衣
この匂ハ、うる集小うらやを空に来られ
匂達小うら、此匂ハ文屋康秀うちの名うき
うみをもる高人といふる詞曲えつくる
様衣めうるの清絶はいりひじやそほ
き葉

りのうのまほり慰ひ心トテ
え法乃ぼり約する、一寸法可レシよかく
雪のうする半々、まの袖の折くとは
とく、ゆう風のらうよ、ぬ振り入
き葉

秋之部

七夕や秋とゆし初めの秋
音目を入れて秋の夜やれりも秋の夜けくのち
さ夕の秋よしかなれと秋情ふすあれもさう
涙のあらぬあくべりてしるすう津かもえく
涙相共も風従昨夜聲彌愁とくわらすこはれり
詞もまよを一叶うち

もみじ葉まゆら葉落葉や葉のと
銀河中央の吹くあさみ遍照小町うきよの
うきよのうと曾良ひめ段匂うきよ遍照小町
半は涙のよ泊と今をもへたひのや難のまむ
半は涙のよ泊と今をもへたひのや難のまむ
半は涙のよ泊と今をもへたひのや難のまむ

をがよおきのまきくとまへて
まみのかく

かのの夜よらうねがり葉ひまくとまへて
うはうももうらべやむくち
あい浦や伊豆一樣よての川
朝起よきり異口すわあやときがくとほゑて
伊豆一樣よての川おうきるを西行ひ
ちの夜の浦雪ふもくぬかよよ秋の星
きりとくとくあい浦の暮浦ゆくとさを
眼あよくゆるうとくやうき星のやく、夜イ
ううう伊豆のうつまきゆゆきよまく波濤ひ
かくまくよかくとくとくよまく

名前とてえを信宿小りがほやすはとやよ
行のき

ふとおもひ枝りへいひの事あまつ
此句のゆきいと詠集小切く匂解わ
それ小えほきみゆかし ひた一ち人の志を
通ふ

白髮の吟

ほりよ月の玉まくはれ武ほう古里ト
ゆうかさのうゆもとむかや少窓の
薑竹り肩うなぐくはよ付らあじ
けのむくよまかくくほくの鑿
くく眉あひみくはれかき食らう

とひりひゆく葉もあまに又うこの字
はやまきとみの白髮なりやよ浦もあうみれ
あひむねふはう肩もや、老すと年月乃
ちてうがみえほづ

一家いふねう白髮の墓ゑ

すくのやうかみなうふ

東花坊う況めく本朝文操よ誠信のあひと
あひうやう故は原うもひうのゆうじうあひあひ
後ゆべりくあひうやうもあ武の集よ墓ゑあひ
あひうやうとくひとあくじうの本編ナ一剣をき
今ハむくよのくも右人よあくじう大振と
りよがまくちうる振あづく一、之者也

胡蝶小もさうて能わる菜虫が
いゝあれとめ造化の手をひく一吹や一生は草
むーとあくと核もく清すとよとを實も
巖石掘り首陽小鹿のとがれとくも人写
一生のとがれ、とくのむすとまろもものすと
ト清すとくらへのむれのむれ是々ハ是々非々
石のげ様と馬よ喰れ

うつかけますかのとがれ跡でけふわん
わん、馬歛木とちく馬の毒されとくやつづく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ふりきれす、ふりきれす、ふりきれす、人小も折れ

下る碌木の筆ハ下學抄三文、之は
老の名れわゆるもとくの年齢

うる尾のし

己うるふほんのうれのうれじ、ちりりうけはるのをね
是とく已うれの尾と、世にあすかすと二十歳と
立の十丈で、おととくとくといふ初老の意象とす
べとあくおとくみぢりくわのよ感む行う

雲龍洞ノトコロノアキラの店
雨廊清光の脇、白氏あ集よ林下幽閑氣未深
とくとくとくせの葉、蘿小りりとくはて一聲
歌れ志、とくとく此木室佳のや廣、え

リコ甲 とよせたう

タ形や鉢ハリの彌
ウ選は船の部小入の部
タ形くわくちや泊
全く秋のタシタ形や
こじめられし色のウ

古今物の名

三葉茅とて暮みれ
葉いろくものくも乃平
これ又がまごとねの
床リもと新小入やキリ
、舟戸ふらりとりそよぐや衣
きるる唐

島ふらはくにゆくまくさ
横川の竹節もくわくと射情あくせ
竹の考

むくやれ甲の下
詞去小室盛の錦のひくれ鎧
物小出くえすやとく此句もめのと
上文字うりうりひとのくと二字
一点の在字れしもにゆくとえりにり
ますドクかのしーうくいふりくわと評と
めく

砧ちくおとせよせう事

みよせの山の秋やよまく草堂へ立す
あぢよけりわゆく小峰をもむかうけに
越え共二二ちよもうりとも流がすの自賛し
いの匂、こみの匂はとふきをもやかくも山紀
本ももおみとてやどり砧あとひき 滯の聲
とほくとすむとほくとほくとほくとほくと
説うるまみくさのうそじくはくはくたと
えぬゆううけく林、き猿森、すりすりせの
林下あれどやくらむすとくらむすとくら
猿森の美猿さぬとくらむすとくらむすと
うぬ猿情とくらむすとくらむすとくらむす

詠作の歌

古御に立よりなりる旅の道、少し見て立ちも
ツの旅よもよもよもよもよもよもよもよも
ソをゆくふり旅の道、ツにつりとせとゆ
くのよく本あく

君ふれわねやまくのほの菊

徒然す、ゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき
松林のよほじくも草、ふかみのゆきのゆきのゆき
惹くほきゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
聖賢からく御ゆく東嶽、ゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
白菊の日、小まくもうちか

是もハ主をナラフ。誰もはあてぬるゝの匂ぢよろ、
室をナラムアツメの火、火とナラ集焉の産ニテ
ヨリのノ。

墨あすき、鏡の下へうちくは月をと
たゞとかる洞、深くそむくも
泉飛雨洗聲聞、蔓葉落風吹色相秋
少りやいはる、あわゝ有弟有妹の法のう
葉ゆきくすゑまよらす、渡はる紫禁升、深
りうへ一叶す、もじく行又
色ゆきく人持す小舟のやいふ
河ちよ富士川のをせりふ、二ワ計よる舟
ゆくれす、小ほりはねは、

ウオノ あきく
わりは仰

文
明
書

西行

あれ、まことにかの事もむづぬに
ハ、われもう一や
雪舟、人の休る月又舟
西行
サレ小舟、まの川、月は、あはり、あり
この、まやの、まく、す、上ああ、下は、ま、下
ゆわわと、およお、ま、持る、けりの、たれ、わ
さく、ま、ゆく、ゆく、月も十六里
新古今集傳抄

うやうそでござる。おまけに、

このあともや二里のわな十公里、すこ
くもくのまきをばかくらのむきとひらけ、おのづからゆきの
うりの日とひれはまくもひれ斗じとひとく
一橋の都をなまえばかりくまくらと有替のむきよ
け印、玄旨のえこひくらしもトカ
ゆく、うねるく後人のむかうとアセアカ

い年の戸れ日やこの作ゆみの坊

紫の戸とすくい下さる事多しを、少しおかげ
又空色と人

地樂は、かくもかくもと、おがゆふにと、一あくま

水のえのじふくらりと一の日のかれ見る閑室
めいもあまきうかしてかかのまほく、やま
るへあじやきのひくくわくをくわく
おの孤漏の月にとお負僧都もちりひ
りく

まうまふ友にうするけのあ
化生す小豆者ニ友の半身一ツすよとめうま
がうりノシカヘの日又の多欲とくつて体へぐる

日や比ひつゝとおひすく
あひのゆき 箕輪月
定めうのみの
まもとむかし
わが山谷

秋の暮れに夜と水に
わくありて山あそび人あ
まことにけり月はり
よちかひうちやうもをふむく
ひじきよもとおもとおもと
うゆゆの江すみはりてあ
破りあゆむしよ、木葉の

卷之三

曰く、
柳の葉
沙のよ

越前敷かえのゆかいのまゝせりと人のこみわらふ
よしとくにそぞらひちのひふうつるあひくさんま
きくわがのうのゆぢまくとくにゆぢよりく
桂下園のあ集よアトトクシヨウカニ統じておもはれ

ソセウカノ

柔の毛やふんいがせの男、う

われにりうつゆれまよひをうへりあひのくくと
さあ、さふらの京きのむこ、うらへまもわく、一や
つきゆゑのほじの京とわくえすまかふく ゆく
氣のもちやあくはぢき仰き
きぬのあらじの京といはゆき拂きといわ
くい小し、みづへの京きの歎き語りかきくら
まゆめ仰かくいへし業事あ事しを量せ
くくまよひの事あく

詞
文

ソヤのまゝ武道を修めんが如く

新和トハラシのふりへとがまえ
あおのひかはりの身の内
守成うちのハ義理のまま新和のうらやま
ハハのうらやまにわらわのうち
つまひのうらやまにわらわのうち
つまひのうらやまにわらわのうち
せんじのうらやまにわらわのうち

皇居易

和
乃
久
一
之
ノ
ナ
ニ
ト

アカギシホリ、わかれ、もとより時を度の秋のうみを
此のうみ、さかふの時を度はむるをいつけども
時を度すく一
このわやり人あふ秋のキモ
す山不見人ともうす詩のひよやけしがれの
カくと大山、林や波の下し

かくの事は人間の心事
のうのうへんにあらわす

後人以中人也
予之口抑含歎而遷也

いのちより余生ありまじ
此處にまづ休む下はまくもんを人ト杜氏
ぬれのやうなふこれまされトトトトトトトト
みのむりのまくはせふきよまの君
秋晴の中にはよしのちまくはせふきよまの君
圓溝は動スカクニシテ小仕じのりレシト
養の子のあらひてたり次第リこれゆくまゆ
御座席はとつえのうけの折角わら
身をかくにまづ利者の秀乃速小も及ぶ

力縮トモの席トモを云ふて席サツともいふ事又
の内トモか一考アガフされと席サツの考アガフとせアガフふあり人トモ
千チものあタマとタマ小コトハり人トモわカクるアガフれと席サツと
つタマしタマしタマやタマシタマシタマよ
あタマシタマシタマはタマ下タマてタマシタマシタマ
おタマてタマシタマシタマ以タマ前タマのタマもタマ喜タマばタマ小コトハ
来タマよタマスタマリタマリタマリタマけタマちタマのタマと
入タマウ法タマルタマめタマまタマ席サツサタマトタマはタマいタマ
すタマせタマのタマまタマ、ウタマシタマ不タマ一タマ字タマひタマきタマ
そタマへタマキタマサタマトタマ候タマのタマ少タマシタマ不タマ往タマとタマ
まタマすタマいタマくタマりタマとタマ

麻の若狭とくみはまく

卷八

きの字ありへいりや麻生やもて
多喜多喜をゆく多喜多喜をゆく
多喜多喜をゆく多喜多喜をゆく
多喜多喜をゆく多喜多喜をゆく

文之部

也。子の心は、門の外に立つてゐるやうだ。
老いぬ娘の如きは、おもむく思ひ出でるやうだ。

洪武大銘

中の扇ふり
休きのひめ秋かくらにて
うつりけふりりて

春と冬の季節をうなぎと呼ぶる
よしとおはれれもあはくでかは
やうに強きタマホカリ又かま
混とゆせりてしおはくあります
川半はりすがちうれし小豆や
芋芋がりきさがちうれし小豆を入
れぬいがくさとえのまじる
小豆さうやしがくさめんじますみ
ものいづくらへりゆくらへり
もへりゆくらへりあひはいの富士山
東坡居士のもへりまうま博ゆくあり
絶れぬく是れの雪うれしわひくま

トカシはやにうけくほ
林に無次無のちふす体小麿
うりふる家種のはるかてもや
やとう小枝はうるけくほくはる
うつけゆ

をくふも内ふ

家種のやううつや

新東アニ修業譜

セシムラキの本家の食事もむずか
もうう家祖の本教もむずかうるも
み字をじゆううやうけく勤務のう

まち法やの流ふまきのやくは地獄をうながされとす。
は地獄をあむすのやくは地獄をうながされとす。
うをうじらくとじつとき半小こ一生と送
えけぬへりとあくやうりといふと破るゆの
極命もかわくはれと波やうととむねう考
にほの里かく和む法師のかうのやうのじう
せうううううううううううううううううう
岩薦つぐねやうぬと典故納うる石碑と
絶曲塚と名つくなふうち角筋ものあ辻山
と補佐してこの石碑と毎月十日十二日
小ほねさの義をかくはキ向くをと絶景の邊
ううい人秋ゆうもきの風流うう

わのゆめふせのとれゆ わあ
此家裡の間もつけどもゆのゆ種もとよひて
る二條院禪寂うううふ達あうううあは
りとめ次ねうううや

市人下様やゆのゆ酒ふ井
は勺ハ口をとくの難云にえつくとく用信文選
ノ上人の難云ハ口をとくうむやと人の難云は
新まき牛革ふゆゆゆのゆゆ酒ふ井南をめ
はきと華穂とがきとくねえとて華下様
ノゆゆゆゆとやくめうわ
これやよの様ふまくぬ古壁

卷之三

毛の邊に
われよりあれどせのあやそれや従ふるもつれとま
うか流小りありしや、のむろ

卷之三

惟高祖の御座室と崇福寺の御堂
かうす中からこの津らきしておまめまに
し雪日光のたゞもえのあらうり特別なれど
ちかくもけくといあつちあくと火より焚たるも
波一さじ一入處ゆ原一竹のさや
えねく梅ぬひ入りを義
難は隣のあハ王仕うに徳のあ(ま)じに仕犯乃
御事のこしきそとてりてむとくり行ゆを(ま)くがうて
ふきのそとてりて梅ぬちくふまくがまくのう
マのえとおひがひきくまのまく小つむくと
あ、あくがひくしきやまやまのまくまく
くうむ小あくまくわまくの感

芭蕉發句評林終

芭蕉發句評林附錄

四季發句

混雜

うくいあややのうふ匂よ柔縮絨
折くよと博湖の葉と梅の花
よそいふ枝のそぞる爐うち
うくいあとの月は己うの十丈
か別へそ云踏せ残すうれ
さ月あや焚くぬ煙の小松葉
谷川やそよてハめくる様の霜
のりうとううそそりそよみ

井棠
允文
臺簫
五津
逸社
杉兩
存良

石川のやまとわざりく 嘉
ごきうてもきの羽きよ柳 うれ
江イのとし雪うづ草木の花
入わのりき里とれ初さく
はの小秋月の山やりく
山もきく菊の月秋う形
川のゆすう山に山ば
ちと、寐よるの月まる空の月
初ちや海の福う松連
連翫や田舎の子の木下
あハ圓不まの色う郭云
鳴鶴や遠くよ子の早れ松

賞日
翠樹
冠紫
禾仲
夏雨
和琴
水
松敬
水
開十
芝光
左簾
奉立
杉兩
天
尹督
雪齊
母志

翠しめやよりかくほひ南の歌
もまた振り髪の柳うれ
梅うき小碎くや空の霞
桜のまをふくれやあいこ
いつひをほてと麻のよこれ
せく風う立波うくこれ
先生の柳うきく碎にう
餘くの氣ひとく吸ふ高ほ
水うく里びと小きのうえ
梅や様うきすのうれ
梅の花角うきのうがえつけ
ひうせやあううおへ天代川

田年路社
午町
左簾
奉立
杉兩
天
尹督
雪齊
母志

三

あゝも月はきぬとサホの松すう
すれぬ鏡の錦やううり
ひきまき月夜の花のむく
るどもものいはや山様
山本うう神にゆや走様
とゆかきすう佐波雪
月の秋もくろく雪の雲うれ
きめうひまことうや乞氣の
うとく圓とちうの鶴川丸
まく様やまくまくまく太平記
まくねるおれりほや苑堂
え奥き跡や處も附川

平砂

東壁

社祥

其鼎

梨雪

杉兩

冠紫

默齊

展衣

御雲

三

春柳のとむ様もき柳の形
清きくや小拂り御く六の墨
仙保姫の丸弓深し山様
ほれくるかの歎か川柳
少くまの音吸ふ蛙
う紙して梅旬かう松葉よ
このまうふう候一牡丹が
英う四百余州の牡丹あれ
風や柳ハ久もけまらへ次
まひの玉子ばかり粉よ様あれ
ひよの授をやちく松

水已
馬塵
亀成
舊狐
來什
珠乾
柏鯉
宇門
不局
社亂

門、岸、うらとえのく雪のひまぐ
林ぬ縄、川のまちや鶴も
僧もくめきにうすし梅の花
云よハリ、うるまのあまう
氏うく女のかわいしきれ

をくやねり様、みもの雪
ホヌのうきうけく踊られ
日の海、はまゆうて踊られ
ある田小れど、いん陸、也
歎のせ、小人の向、やう角力
遠一とき、坐へぬ時の破れ

立津 木髪 英阜 曙光 冠紫 交馬
杉雨 鷄口 信鳥

志や子のあきぬのもと
月すく小百姓もくよ、一つ松
青柳や今こそ月のあこれ
涼、やタえを處る小杉
坂二つ、残れも難の雪ナド
かく壁や火もひきて放生會
朋、方やよもよむと、湯小舟
女院、湯をぬや雪の爪木、う
車、お、やの、あえ、う、蓬の葉
桜子や、の、華の下の、誰う娘
よ、拭、う、肩、小かけて、や、猫の、
春、歸、う、も、う、の、あ、よ、れ

杉谷 翠雨 胡丸 纪什 茂松 桐雨
杉笠 妻子松 桂雨 吊風

筆氏略えへ等は筆者不甚しく不易
流傳の作者より附しがざきむるばつ

が一ノリ

紅葉や鶴もお端の梅の花

夕はすよ菊はともやスの花

曙光

秋泉また一物

旅難の様もや薄ゆく

酒小豆と薺り蕉も秋の支

入の煙後竹の子の草

じくみよ向ひ歌の草

ま書ハ初め梅の角う那

かき立す木の草や白牡丹

琴水
鯨巴
蕉雨
紀付
孤星

紫水や一把りびんしつれ雪
月夜も鶴や菊も孤星
萬代やもくもの紫はいづれの果
此集のうちうららかな歌
人相似や鳥の紫小やいと花
凡雅のほほほほほほほほ
うむハ秋もきつれや鶴牛
人生者翁何よふ碧とけと
それけやきのよば時小川か

全 全 全

追加

湖文

江戸からも歸りて十格のま
まちあが角でくわや鶴牛
をかねてうひてより仰そられ
ばくや深まり小まき繁る
くき福もまやち峰の仲のふ
和様すゝ墨すくねむねあくわ
にすくやまと桂枝て彼の床
菜いは村とくえよふと木の繁
すくとくは清らか麻の角

紀玉漁悅英阜雨竹全野林松而空空

寶曆八年

寅正月吉日

書肆

京堀川錦上

西村市御右衛門

江戸本町三十日
西村源六

